

被爆者の声 若者に

カフェ気分 気負わず対話

そう遠くない将来、被爆者の「生の声」が聞けなくなる。体験をどう引き継いでいくか。この命題に広島大4年の福岡奈織さん(22)＝広島市＝が挑んでいる。広島原爆の日の6日には、広島市で被爆者と若い世代が気軽に対話できるイベントを企画している。広島で生まれ育ち、被爆3世でもある福岡さんは「被爆者のメッセージ」を届ける責務を感じている。

広島大4年・福岡さん

準備の途中で作者の中沢啓治さんが亡くなったことだった。話を聞きたくても聞けなくなる日が迫っている。そう実感した。一方で、こうした活動に参加すると、被爆3世ということで注目を浴びた。それが嫌で、表立った行動を避けていた時期もある。昨年、非政府組織(NGO)

「はちろくトーク」と題 きっかけの一つは、3年0「ピースポート」が主催したイベントは、昨年8月前に広島市で計画された漫画催す「証言の航海」に同じに初めて開催し、今年1月画「はだしのゲン」連載開始したのが、もう一つの転機となった。ナチスの強制



被爆者と若者をつなぐトークイベントを企画している福岡奈織さん

11月2日午後、広島市中区の平和記念公園

6日にイベント 体験聞ける最後の世代

収容所があったアウシュビツ(ポーランド)を訪ねた。そこで祖父が犠牲者だと知らずに生きてきたところの体験くらいで、何が話を知り、自分と重なるのか」と疑問をぶつた。福岡さんの祖父は爆心地から2・5キロ付近で被爆した。しかし、被爆者健康手帳を持たず、詳しい体験を家族にも語らないまま、福岡さんが生まれる前に亡くなった。広島や長崎でも、原爆投下の事実を知らない若者が増えている。ただ、一方的に被爆体験を伝えるだけでは若者に届かないとの思いもあった。「押し付けではなく対話が必要」。思い付いたのが、クナ継承があってもいい」

「押し付けではなく対話が必要」。思い付いたのが、クナ継承があってもいい」コーヒーを片手に被爆証言と福岡さん。被爆体験を聞き、自由に感想を語りかき聞ける最後の世代と合えるカフェだった。イメテ「次の世代に伝えるパト」はテレビ番組の「徹子」になりた」と願っている。お茶の間の雰囲気。トークは6日午後2時から広島市中区の広島帝劇夏の開演では、大学生ら約100人が集まった。その中で伝承する難しさも実感した。昨年

(古川幸太郎)